内項を 2 つ取る「他動詞」の項構造と文法関係

榎本　拓也
（上智大学大学院）

いわゆる「経路のヲ格」をめぐる研究（三宅 1996 など）や動詞の自他交替をめぐる研究（影山 2002 など）において、通常の他動詞とは異なり内項を 2 つ取る「他動詞」が報告されている。文法上の主語の意味役割は主題、目的語の意味役割は場所・着点・経路などとされ、動作主などの外項を持たない。また受動文にできないことも報告されている。

(1) a.　樽が坂を転がった　　b.　*樽が坂によって転がられた

岸本（2005）は「かけ」表現をや数量副詞「いっぱい」を使ったテストによって、動詞が直接取る内項は主語 1 つであるとする。ヲ格名詞句は「いっぱい」によって数量が規定できない内項として働いていないとしている。

(2) a.　溶岩が山肌を流れている　　b.　流れかけの溶岩
　　c.　*流れかけの山肌　　d.　溶岩が山肌をいっぱい流れた　（岸本 2005）

本発表では、Baker（1988）の主題役付与均一性仮説（UTAH）に従い、同一の意味役割を持つ構造は同一の統辞構造を持つと仮定する。動詞が取る 2 つの名詞句は VP 内に基底生成されると考えられることから、主題が *v* の端を経由して主語の位置に移動すると主張する。

同様の現象は英語でも観察される。Cortés (1995) や Nakajima (2015) によれば、*resemble* や *suit* などは項を 2 つ取るが受動化できず、動作主の意図を表す副詞と共起できない。

(3) a.　The suit fits me.　　b.　*I was fitted (by the suit).

(4)　*That job will *intentionally* suit Mary when she is older.　(Cortés 1995)

Nakajima（2015）はこれらの動詞が非対格動詞であって、文法上の目的語は音形のない P のついた PP だと提案する。しかし文法上の目的語は隣接性条件を満たさなくてはならない。

(5) a.　The suit fits (*very well) me.　　b.　The suit fits very well for me.

本発表では、格付与のメカニズムに違いこそあれ、日本語（1）も英語（3）も内項を 2 つ取り、文法上の主語が移動したあとに文法上の目的語に対格が与えられることを示す。

参考文献：Baker, Mark C. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing.* Chicago: University of Chicago Press.　Cortés, Corinne. 1995. Argument Structure: English Verbs of Suiting. *Revista Alcantina de Estudios Ingleses* 8: 69–78.　影山太郎（2002）「非対格構造の他動詞：意味と統語のインターフェイス」　伊藤たかね（編）『文法理論：レキシコンと統語』119–145. 東京：東京大学出版会.　岸本秀樹（2005）『統語構造と文法関係』東京：くろしお出版.　三宅知宏（1996）「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110：143–168.　Nakajima, Heizo. 2015. Unpassivizable Transitive Verb and the Minimality. In *Yori-yoki Daian-o Taezu Motomete [In Untiring Pursuit of Better Alternatives]*, ed. Egashira, Hiroki, Hisatsugu Kitahara, Kazuo Nakazawa, Tadao Nomura, Akira Saizen, and Motoko Suzuki, ,56－67. Tokyo: Kaitakusha.